

人間社会が直面する危機とは

——尾関周二著『21世紀の変革思想へ向けて』の問題提起を受けて——

柴田章

気候変動、SDGs と、地球環境問題は政治・社会の中心課題となった。しかし、日本の従来の市民運動・社会運動は、この問題群とうまくかみ合っていないように見える。本書『21世紀の変革思想へ向けて——環境・農・デジタルの視点から』は、運動の基盤となる理論・思想の抜本的再構成を意図して書かれた。

1) さしせまる危機か？

「脱炭素を効果的に実行しなければ、温暖化は2030年には後戻りできない限界点に達するとされる」(p19)。著者は慎重に判断を留保しているが、「本当に限界点に達するのか？」「限界点をこえるとどうなるのか？」「脱炭素を効果的に実行するには何が必要か？」……こういった疑問がただちに出てくる。我々はさしせまる危機の中にあるのか？

一方、著者は終章で、人間と自然の商品化が近現代社会の諸問題の根源にあり、それらの脱商品化が可能となるような条件づくりが脱資本主義の根幹にあるべきとした上で、こうした脱資本主義は容易ならざる試みであって、長期的展望のもとでの漸次的脱出をはかるという視点が必要であるとする。ほぼ100%商品世界に生かされる我々にとって、脱資本主義が簡単ではないことは論をまたないが、しかし、2030年が限界点だとして、資本主義システムが支配的な中で対処は可能なのだろうか。「人間の歴史は、根底において人間社会の物質代謝を通じてのホメオスタシス〔恒常性の維持と発展の志向〕が実現していく過程」(p.135)とも指摘するが、ホメオスタシスを実現させるものは人間の主体的な活動であるべきで、社会の崩壊による暴力的強制によるものであってはならないだろう。

2) 温暖化について

今日の急激なCO₂濃度上昇が産業活動によること(地中の化石燃料を採掘し地上で燃焼)はまちがいない。それによると思しき大気温の2、3度の上昇は、人間生活に甚大な影響を及ぼす。しかし、地球の誕生からふりかえれば、窒素とCO₂一色だった地球大気が、生物の光合成により水とCO₂を原料に酸素を増やしていき(当時の生物には酸素は猛毒)、酸素濃度18%に至って頭打ちとなって、以後、酸素呼吸を装備した高等生物を支えている。今日のCO₂濃度上昇は、地球史においては微少な変動であり、その上昇は生物の光合成を促進させるはずで、「脱炭素」は人間中心の要求ともいえる。一方、人類史を見れば、温暖化の時期には作物の収穫が増えて文明が栄え、寒冷化の時期には不作による饑餓、伝染病の発生などで世界人口を減少させてきた。

なぜ今日、温暖化が問題なのか。ひとつは、温暖化のスピードが速すぎて、人間社会も生

態系も対応しきれない。気候変動に対して、生物はたとえば生息域を移動して対処するが、そもそも生息域が著しく狭められた野生生物は移動する余地が小さい。全世界を埋め尽くしている人間は、富裕層は別にして、国境を越えて難民となる他はない。

一方、人間は人工的な生活空間を構築してきた。工場に限らず、先進国では事務所・住宅もエアコンを装備するが（ミニ工場化）、物質は、加熱よりも冷却の方が多量のエネルギーを要する。「生態系と無関係に市場適合的なものを生産する工業技術」（p.243）では、工場の温度管理に膨大なエネルギーを投入している（ついでに、工業技術は生態系の精髓たる水と酸素を大量に使用し、廃棄する）。現代社会は、歴史時代とちがって、特異的に温暖化に対して脆弱な社会なのである。

温暖化による異常気象は地域によって現れ方が異なるが、干ばつが最も深刻であろう。故中村哲医師いわく、2000年にアフガニスタンを襲った大干ばつは、氷河の融解による雪解け水の途絶を原因とし、小麦栽培をあきらめた農民をケシ栽培へと駆り立て、その後のタリバンの暴走と米軍の介入をまねいた。同医師は灌漑用水建設の指揮にあたったが、古代より灌漑事業は地域間の緊張の火種でもあり、凶弾に倒れた。

地球史では平均気温の上下を繰り返し、その都度、地球物理学的条件ならびに生態系の機能によって、現代に近い気温に引き戻された。現在の気温上昇が青天井に進行して、全地球がサハラ砂漠状態になるとは考えにくい。人類絶滅の危機という点では、全面核戦争の方が深刻だろう。とはいえ、温暖化のスピードを食い止めないかぎり、世界の各所でアフガニスタンのような事態が危惧される。「2030年が限界点」とはそういう意味だと理解する。

3) 〈農〉の復権と労農同盟

地球環境問題の関心は、石炭火力発電の停止や再生可能エネルギーの開発、エコライフなどに集中し、農業への注目度が高いとは言えない。著者は、マルクスをふまえて、問題の本質を、人間と自然の物質循環の攪乱にあると見た上で、人間と自然の物質代謝の中核にある〈食〉、ならびにそれを支える〈農〉に着目し、新たな「労農同盟」を提唱する。

高校時代からの友人Y君は、十数年、養護学校で知的障がい者の教育に従事していたが、卒業後の就労先が閉ざされている現状に、生きがいのある就労先をつくろうと、長野県の山奥の廃村に就労施設の「リンゴ園」を設立し、家族を残して、数十年にわたって苦勞を重ねてきた。東京育ちで農業体験もないY君が、なぜ山奥の「リンゴ園」なのか、にわかには理解できなかった。数年前、就労者とリンゴ購買者（友の会会員）が現地で交流する機会があり、参加した。山ふところに抱かれた果樹園で、たわわに稔る各種リンゴ樹林を散策し、キノコを採り、リンゴをかじり、こつこつと農作業をこなす就労者に接して、ストーンと落ちた。都会の作業場では得られない開放感、収穫の満足、つくる人と食べる人のつながり。

かつての労農同盟は、農民の大海の中で、少数者である都会の組織された労働者の運動が、どう農民多数の支持・共感を獲得するかであったが、今日の日本の農業従事者は、就業人口の4%台、世界中に農産物を売りまくっているアメリカでは1%台だ（日本の場合、外国人技能実習生、派遣事業従事者も季節的に農業に従事しているだろう）。たった4%で、しかも平均年齢60代後半という農民が、日本の自給率30%台後半を生産しているのである。

多数の人々が農業にたずさわる条件を多様に確保すべきだ。Y君のリンゴ園は、福祉作業

所助成金にも支えられて、きめ細かい農作業を可能にしている。エリートたる4%の農業従事者が農業の指南役となり、多数の市民が援農に参加する、労働組合もそうした活動のための条件整備を経営側に要求する、これが私なりの「今日の労農同盟」のイメージだ。

4) ホメオスタシスか矛盾か

1個の細胞内では数千の生化学反応が重層的に進行し、しかも細胞内の化学的状態は、各種原子の個数をカウントしているがごとき精度で安定している。この奇蹟を生理学・生物学は「ホメオスタシス」とよぶ (p. 132)。本書に紹介されるダマシオ『進化の意外な順序』は、生物がその起源から、未来に向けて発展する志向を内在させていると主張する。ダマシオがダーウィン流の生物観・進化観 (突然変異と自然淘汰) に対抗する根拠は、エントロピー (無秩序さ) 増大にあらがうという生物のあり方だ。ダマシオの「膜に包まれた細胞内での、最高度に効率のよい化学反応系を維持する」という点までは説得的だが、発展志向はエントロピー理解とは別の次元と思われる。私は、生物と環境との相互関係、すなわち生命の主体的活動が周囲の環境 (他の生命をふくむ) を変化させ、したがって「自身の最高度の効率のよい化学反応系」も変容するという繰り返しの中から、全体として種々の進化が進行すると考えたい。ホメオスタシス (恒常性への最適化) は生命の普遍的属性だが、生命誕生以後、発生した生物種の99%は絶滅しており、ホメオスタシスを種の存続の根拠とすることはできない。ネアンデルタールにはネアンデルタール固有のホメオスタシスがあった。

生命にとってのエントロピー増大克服という難問を提起したのは、物理学者シュレディンガーの『生命とは何か』(1950年)で、生命は別の生命体を食べることで、高度の秩序を確保し続けるとした。福岡伸一は、動物が食べ物を消化する際、高い秩序をもったタンパク質をいったんはアミノ酸に分解していて、シュレディンガーの主張はあたらないと批判。生命が細胞内でタンパク質など生体物質の破壊と創造を絶え間なく繰り返しており (「動的平衡」)、そこで生じる物質とエネルギーの細胞内外の流れこそが、エントロピー増大克服の秘密であると主張する。

生命・環境のイメージを、ホメオスタシスのような調和と取るか、ヘーゲル流の矛盾ととるかは悩ましい (「矛盾はすべての運動と生命性の根本である」)。研究者にして労働運動家のルウォンティンとレヴィンは、「環境保全」という目標設定は、生物と環境の相互関係、変化してやまない自然についての無理解があり、表層的に個別の生物種の保護などにとどまってしまい、大局的な環境変化に適切に対応できないと批判する (Lewontin, Levin, “Biology Under Influence”)。だが旧社会主義国は「自然は変化する」というドグマをいいことに、極端な環境破壊に走ってしまった。地球史レベルでの巨大な環境変動を受け止めつつ、直面する環境危機に対して、その時点に見合った「環境保全」の目標を立案する以外にないであろう。

5) 「自然生態系に定位する物質循環の実現」

40億年の時を経て、自然界・生物界では、あらゆる生化学反応の順方向・逆方向を体現する微生物活動、細胞レベルでの同化・異化作用、菌類やシロアリによる木材の分解と、繊

横かつ重層的に物質循環の仕組みが構築されてきた。空気中の酸素は植物・光合成細菌の細胞を経て作られ、土壌はミミズの消化産物であり、真水の相当部分が植物の維管束を経て大気中に蒸散する。

これに比して人間の物質循環活動（生産・流通・消費・廃棄）は乱暴だ。「廃棄物」の後始末は、焼却処理を別にすれば、ほとんど人間以外の自然の営為にまかされている。廃棄物処理の基準は、もっぱら人体への病理学的影響を尺度としていて（人間中心）、「環境基準」とは言いがたい。使用を終えた人工物は、生態系の循環に収まるかたちで環境に戻されて、はじめて自然生態系に定位したと言える。労働価値説は、生産に投入される労働量が商品価値を定めるとするが、生態系にもどす際に投入される労働と資源もカウントされるべきだ。

ヒトと家畜で陸上ほ乳類の99%を占めるという現実も重い。環境負荷の根本は大量生産・大量消費と富裕層の浪費にあり、度外れた格差を抜きにしての人口問題の指摘は的外れだ。しかし、強制的な人口政策が人権抑圧であることを自覚した上で、長期の展望で人口レベルを抑えていくことも見通したい。

人間を排除した自然保護区を確保するという発想は、マルクス「自然の社会化」（p. 79）の展望にもあわない。著者は〈農〉に対応して日本の里山をあげる。あわせて、極北のイヌイットやアマゾンのヤノマミのような狩猟採集の先住民に焦点をあて、彼らの生活を根拠に広大な原生林等の保護をはかることが、持続的に生態系が維持される道と思われる。「自然の社会化」とは、人間が関わることによってこそ、自然は守られるという立場ではないか。

本書がカバーする領域はまことに浩瀚だが、読者にとって自分の関心と重なるところがどこかに用意されているとも言える。本書を足がかりに、異なる問題領域とされる事柄がじつは底流でつながっているということを感じさせてくれる著書といえよう。

（しばた あきら・元編集者）